

PROFESSIONAL AGRICULTURE GUIDE

東京8 春起こし使用方法

土の中の生態系を劇的に作り変える。
その年、一年の収穫量を左右する「失敗しない土作り」の極意。



微生物



土壤改良



収量増

STANDARD DOSAGE

推奨使用量

★ 1 リットル／反

有機物の「高速分解」
で未熟リスク回避

団粒構造を作り「水は
け・水持ち」改善

植え付け後の「初期成
育」が抜群に

通常の春起こしと課題

冬の低温環境

1月～2月は地温が低く、堆肥（牛糞・鶏糞）や前作の残渣、緑肥をすき込んで、土着の微生物の動きが非常に鈍い状態です。

分解の停滞リスク

- ✗ 有機物が未分解のまま残りやすい
- ✗ 春先の急激な分解によるガス発生の懸念
- ✗ 植え付け適期に土が仕上がってない

東京8投入で起こること

▶ 有機物の「高速分解」

HIGH-SPEED DECOMPOSITION

強力な1500種の複合微生物群が、冬の低温下でも有機物を効率よく分解。春の植え付けまでに、植物が即座に吸収できる良質な養分へと変換します。

▲ 「団粒構造」の形成

AGGREGATE STRUCTURE

微生物が出す粘液（多糖類）が接着剤となり、土の粒子を結合。「水持ち」と「水はけ」を両立したふかふかの土を作り出します。



春のスタートダッシュが違う！

東京8を使うメリット（使わなかった場合との比較）

COMPARISON CHART

CATEGORY

🚫 東京8を使わなかった場合

✓ 東京8を使った場合



- ✗ 春に地温が上ると急激に分解が始まり、「ガス害」が発生して根を傷める。

未分解リスク



- ✓ 植え付けまでに分解が完了・安定。ガス害の心配がなく、最初から根がスムーズに伸びる。



- ✗ 土が固まりやすく、酸素不足になりがち。根の張りが浅くなる。

土の状態



- ✓ 微生物が土を耕してくれるため、酸素が豊富で深いところまで根が張る。



- ✗ 土中の微生物バランスが偏り、特定の病原菌（カビなど）が増殖しやすくなる。

病害虫リスク



- ✓ 多様な微生物が「席」を埋めるため、病原菌が入り込む余地がなくなり、連作障害が出にくく。



- ✗ 与えた肥料の一部が土に固定され、植物が吸えない状態になる（無駄が出る）。

肥料の効率



- ✓ 微生物が肥料分を分解・キレート化し、植物が吸いやすい形にキープ（保肥力の向上）。



失敗しない土作り



せっかく入れた堆肥が原因でガスが発生し、苗が枯れて植え直し……という最大のロス（時間・コスト）を防げます。

✓ 未熟堆肥のリスク回避

スタートダッシュ



土が整っているため、定植直後の「活着（根付き）」が抜群に良くなります。最初にしっかり根を張った植物は、その後の悪天候にも強い！

↖ 結果として収量アップへ

化学肥料の削減



土の中にある未利用の養分を微生物が引き出してくれるため、長期的には化学肥料の量を減らしても収量が維持できるようになります。

💰 コスト削減と土壤保全

結局のところ、「手間の軽減」と「確実な収益」につながります



“

「今、堆肥をすき込む時に『東京8』を混ぜておくだけで、春までに微生物が土を『発酵』させてくれます。

普通なら冬の間は分解が進まず、春先にガスが出て根が傷むリスクがありますが、東京8を入れておけばその心配がありません。

春にはスコップがスッと入るようなふかふかの土になり、苗の根張りが全然違ってきますよ。」

「ガス害」や「未熟堆肥」の心配がない

初期生育の違い＝収量の違いとして訴求

STANDARD DOSAGE

1リットル／反